



# なつめ 5月号

〈編集・発行〉  
鹿児島市立喜入小学校  
〈発行日〉  
令和3年5月21日

## GIGA スクール構想 タブレットが文房具となる時代

校長 内村 英人

「紙と鉛筆」「黒板とチョーク」

授業で使用するメディア媒体として、これらが一番だと、私は未だに思っています。

しかし、もうそんな頑なさでは、これからの時代にはついていけません。

先日、私もリモート授業を体験しました。鹿児島大学教育学部で80人の大学生に行った講義が、いわゆる遠隔講義でした。まず、パソコンから学生さんに講義資料のデータを送信しました。

「全員、届いてますか？」

一人、届いていないという返事がありましたが、数十秒後に「大丈夫です。」と返答が来て、講義をスタート。自己紹介で軽く笑いをとろうとしましたが、ウケたのか、スベったのか反応が分かりません。顔をモニターに見せている学生もいれば、見せていない学生もいるのです。

それから、私が出した問題に対する考えを二人の学生に聞きました。モニター越しですか、これは対面で行うのと同じようにできます。講義の中ほどでは、グループ討議をさせました。事前に設定していたおりにランダムにグループが生まれ、学生たちは互いにパソコンを通して話し合っています。その声は、聞きたいグループを指定すると、こちら側で聞くことができます。そのおかげで、学生たちの様々な考えを把握することはできました。しかし、対面であれば各グループの中に入っていて、問いかけたり助言したりすることがしやすいのですが、それはできませんでした。技術的にはできるのかもしれませんが、互いの表情を見ながら、身振り手振りを交えての交流ができない点は、歯がゆい感じがします。そして、事前に設定した時間になると、自動的にグループが解かれて全員が、最初のルームに帰ってきました。それから、幾つかのグループの代表に議論したことを話してもらいました。彼らの意見をもとに、講義を続け、最後には先輩としての思いを伝えて終わりにしました。

教室での授業に近い形でできることは分かりました。しかし、限界があることも実感しました。また、離れている仲間とリモートで意見のやりとりをスムーズにできる学生に感心もしました。

ただ、このスタイルで行うための準備には、かなりの時間を必要としました。講義開始時刻の30分前に研究室に入ると、大学の先生が、リモートのセッティングを必死にしておられました。先生とは旧知の間柄でしたので、思い出話でもしようかと思っていたのですが、それどころではありません。もし、学校でこれをするとなったら大変だと思ったのも正直な感想です。

昨年度末、4年生以上の子どもたちには、一人に1台タブレットが配布されました。今、それを使った授業が少しずつ始められています。タブレットを使った授業の6年生の感想を紹介します。

- ・ 道徳の授業：先生にいろいろな意見を送ることができる所がいい。
- ・ 総合の授業：エクセルやワードで文字を打つのが簡単。タイピング練習もとてもいい。
- ・ 理科の授業：実験を撮影して、後でノートに書くときに見返すことができる。結果がどうなったかを確かめる時に、見返すことができるのが便利。
- ・ 社会の授業：これまでは、教室の前で書画カメラで教科書やノートを映してたけど、今は、タブレットでそれぞれみんな見れるから便利。
- ・ 家庭の授業：これまでは、自分たちの考えでしてたけど、今はタブレットを使って周りの友達と考えを話せるから便利。

タブレットが文房具となる時代が、そこに来ています。

